

～ するとは別の仕方: 「言うこと」と「言われたこと」

この研究は、レヴィナスをその最大の困難にしたがって理解しようという決意によって、活気付けられている。この決意は私の「読み」の案内という名目で、『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方へ』の言わば偏屈な選択の可能性を説明するものである。この本の主要な賭けとは、打ち立てられるべき関係(rapport)の運命を、責任の倫理と存在論との間で、それぞれの言語活動の運命に結び付けることにある。つまり、「言うこと」は倫理の側にあり、「言われたこと」は存在論の側にあるのだ。二つの分野(discipline)がその固有の意味を形成するやり方で、哲学することの新しいやり方によって引き起こされた二つの困難を主要な位置にもたらず限り、(この)賭けは大胆不敵なものである。即ち、困難とは一方では存在論とのその疲れを知らぬ対決から逃れることの倫理についてであり、もう一方では存在することの制度を乱す例 外 = 受け取ったものの外のもののために、それに適合する言語活動、つまりその固有の言語活動、言うなればその「言うこと」の「言われたこと」を見出すことについての困難である。(これら)二つの困難は不可分であり、言語の中に、(また)別の仕方、～ するとは別の仕方という副詞の中に、凝縮されている。確かに、常に、「～ するとは別の仕方」によって、その支配を中断することや中止することを企てる「～ するとは別の仕方」そのものから身を振りほどかなければならない。だが、同時に「存在すること、つまり本質 = 存在すること(essence)の流儀が運ぶ流儀」(本の最初のページによれば(a)を加えて、essance といった方がいいだろう)に対する、この「いかなる名においてであろうと」責任の倫理の先行性が宣言され、またされなければならないという事を要請されていること、についての言語的分節を与えることを企てなければならない。これらの対になった困難の背景に、私は「言うこと」の制度(régime)と責任の倫理との間で、重なりを知ることについてのものとしての、形式でない困難を明らかにしたい。

二つの考察を先立ってやっておくことにしよう。

まず、(この)本はいかなる序論をも示さ 認め ない。我々は直ちに事のさなかに(*in media res*) 放り込まれる。それは既に哲学そのものではないような哲学についての序論の可能性を否定したヘーゲル、また『存在と時間』の1ページの1行目における存在についての問いの忘却の表明は彼にとって序文の削除線の価値があるとしたハイデガーにおけるがごときものである。

二番目の考察、それは最初のものと同様に結びついたものである。即ち、梗概はいかなる明白な前進も認められないのである。それに続く諸章も、相互に付け加えあうようなことはない。全ては梗概(一三-四二ページ)と名付けられたものにおいて言われており、ここでは我々にとっては特に興味深いやり方で題を付された、つまり「別の仕方 言えば」と題された最後のごく数ページにおいて(も)繰り返されているのである。「言うこと」について言われたこととは別の仕方のものは「別の仕方 言えば」を互いに求め 多分互いに与え 持っている。梗概の末尾(三七ページ)で著者が「道程」と名付けたもの それは直ちに位置の 外 = 展示という語(第二章のタイトルともなっている)によってコメントされる語である は二つの端の間で示される。この後は梗概(ある意味では完全なもの)の彼方よりも非 曲がり = 広がり、つまり責任の倫理の主要なしわ、即ち身代わりを明らかにする「しわを伸ばすこと」を告げる。梗概は言う。「身代わりは、近さの奥底で、存在するとは別の仕方であるがごときものである」(三七ページ)。従って、しわを伸ばすことあるいは開削は、言うなればそれは言説の地平に、本の中で述べられている言説からして、「言われたこと」の側で、これから我々が見ていくように、主題、主題系、主題化を置く、哲学における

主題化の問いを据えるのである。従ってもし前進というものがそういった哲学の内部で可能であったならば、倫理の言説からの存在論の言説の偏流、即ち「第三者」と「正義」の觀念の影響下にたびたび告げられ、實際口火を切られてきた偏流を示すことに哲学は存したかもしれない。(しかし)今度は、身代わりと相互性についてのこれらの觀念の場が困難を形成する。言われたこととは別の仕方である「言うこと」によって それは本の最後のパラグラフが、まさに「別の仕方言えば」と名付けている(こと)そのものである 呼び起こされた新しい「言われたこと」を現出させる限り、一つの前進と呼ばれうる正義と第三者の主題系は、私の研究の第二部のために、留保しておくことにしよう。

というわけで梗概に入ることにしよう。それは本の続きの諸々の折り目を広げて行く中で(も)充溢を行いつづけることになる。

梗概は明確に存在することの(他なるもの)(一三ページ)という最初のサブタイトルから始まっている。このサブタイトルは全てを、いやむしろ全てを、全体を、全体性を前言撤回(dédire)している。このようにして告げられた根本的な対立は他者のあらゆる他の顔つきの「存在するとは別の仕方」を分離することを目標としている。(そして)その存在論はそれらを含み、吸収し、または良く出てくる表現によれば、それらを(回収する)ということが示されようとしている。(存在することの *Esse* はそれ 自身 ではないという事を支配する)(一四ページ)。「～するとは別の仕方」は他者を超越するが、ある意味ではその他者は埋め合わせの平和における内部抗争を吸収し、否定性の隔たりの中で循環している。ところで、存在することの、転覆ではなく凱旋を刻み付ける相互 存在(*inter-esse*)、つまり相互利益存在へと存在することをする他者のこれらの顔つきは、虚無の隔たりがある限り、決して決着がついたわけではない。従って、本の言表を構成する悲劇=ドラマの二人の立役者が舞台に入場してくる。そしてその名は「語る」と「語られたこと」である。カードは全て一息に行爲のうちに投げ出された。すなわち、「語る」、つまり動詞である「語る」は、(一者の他者への近接)、(脱相互利益存在)(一者の他者に対する責任)(身代わり)に接合されているのである。これらの枢要な諸語の連なりはたった一つのページに結び合わせられている(一七ページ)。そこでは著者が認めるように、(見越しながら)質問が投げかけられているのである。

だが、折り目を伸ばすことをはじめよう。なぜ、一者の他者に対する責任の存在を推定させるランゲージュであるところの「言うこと」を直ちに(起源的な)あるいは(前起源的)と呼ぶのか?それは、語られたことの、存在論的な制度に含まれるいかなる起源についてなのか?つまるところ、それは「言われたこと」の恩恵について「言うこと」の別の仕方を取り消す、ランゲージュの相関関係についてなのだ。この相関関係は「言うこと」を単純な内部分裂、そしてついには「言われたこと」に対する従属にする。(「言うこと」と「言われたこと」の相関関係、つまり「言うこと」の「言われたこと」についての、つまり言語学の体系および存在論に対する身代わりは示顕が請う褒賞である)(一七ページ)。我々はここで立ち止まることにしよう。即ち、レヴィナスがここで意味しているのは、「言うこと」と相関的でありつづけ、また引き離し、身代わり、つまり(非フッサールの意味での)「還元」を構成しない、「言われたこと」との間の区別には彼は何も期待していない、という事なのだ。この遊戯は、存在することに集中された哲学に打ってつけの立言的なものについて内的なものと思なされたものであり、またこの遊戯は言表の意味論と言表行為の語用論との間の対立においてランゲージュの分析哲学が体系化したものなのである。

という事で「言われたこと」と「言うこと」は認識される。それはまさにレヴィナスが、哲学的に言えば非関与的なもの

と見なしている、この相関関係なのだ。他者の最初のその顔つき(figure)は、彼によれば、付属、つまり余計なものを言表の記号論に付け加えさせるだけだというのだ。だがそれはなぜだろうか？それは立言への傾向、それが名詞化、ランゲージュの意味形成作用のあらゆる可能性の命名(faire-nom)であるゆえなのだ。レヴィナスはここではランゲージュにおいて「言うこと」「言われたこと」の相関関係が、動詞と名詞との間の相関関係によっているという事実をよりどころにしている。その事は、名動詞 (*honoma-rhêma*) の極関係の上に述語の行為を打ち立てている『クラテュロス』以来知られていることである。そして事実上、この相関的な構造の二つの近代的解釈が『クラテュロス』の主張を確証している。つまり、現象学においては、それはノエシスノエマの対組であり、ランゲージュの理論においては、デヴィッドソンの『行為と出来事』において見られるような諸々の出来事、つまり諸々の行為に対する動詞の割り当てである。(だが)ノエシスの現象学、あるいは動詞についての言語学が俎上に載せられていようが、動詞と名詞との間の相関関係の二つの解釈は「言うこと」の語用論の可能性を開くかもしれないのだし、それは最初の概算では、「言うこと」と「言われたこと」の弁証法を正当化できるかもしれないのである。だが、レヴィナスにとっては、他(者)性を抹殺する相関関係しか、俎上には乗り得ない。それは彼が主語について述語の部分的同化と見なしている述語操作の分析でもってそれを証明しようとした通りである。部分的同化、それは(AはBである)という限りにおいては、(AはAである)ということではない。にもかかわらず、同化が問題となるのは、(～として)というハイデガーによって彼の側に提起された、かの有名な *Als was* の同化力を持つつながりのおかげで、述部形成の呼称が派生するからである。陳述はこの意味においては、同一性を差異性に打ち勝たせる操作でありつづける。それこそ近接と近さにおける他者の他者性以前には真の差異、真の他性はないと主張する最初の方法なのである。

論争はおしまいになってしまっているのか？(いや)我々はこのちに、責任の発見にふさわしい、意義深い言説の探求において、名固有名のある種の仕返しが、立言的な「言われたこと」の倫理的還元より後の「言われたこと」に叶うように、もたらされるに違いないであろうということを、了解する事になる。

思考のこの動きがその事について前言撤回を述べることによって反撃されるような、他性の他なる企て又は誘惑を考察する前に、その動きについてまとめておくことにしよう。

レヴィナスは現象学の教説についてのテーゼと等価な、主題化的なものという題目の元に、「言うこと」と「言われたこと」の相関的な新たな統一体を再び集める。そこでは他者のカテゴリーのある種の使い方が明らかになるが、それは直ちに中性化されるためなのである。この点において、『存在するとは別の仕方』の著者によって述べられている(第二の困難)、つまり今度は己自身を自ら主題化してしまうという困難、そしてその例外的固有の場、即ち接近、近さ、責任、つまるところ身代わりの、倫理の言説における場における困難、我々が突き当たるのはそのような困難の起源である。差し当たり、言説とは我々が協約を告発するという意味では、告発でしかありえない。告発は裏切りの弾劾によって養われている。19ページを読むと以下のようにある。(存在するとは別の仕方、とは最初から、ここで探求されているものであり、我々の前へのその現われ以来、「言われたこと」を表明する「言うこと」を支配する「言われたこと」において裏切られたものである)。それこそまさに、敢えて言うならば、レヴィナスが(前言撤回)という語で表す、裏切りの裏切りである。(即ち、彼はこんな風にも言っている)(存在するとは別の仕方、は、存在するとは別の仕方だが既に別の仕方存在することをしか意味しなくなり始める「言われたこと」から存在するとは別の仕方、をこのようにして引き離すために前言撤回をもなさなければならない「言うこと」の中に自らを表明する)

(同所)。我々はここに、他人ではないであろうし、また別の仕方¹で存在することの諸々の変容でしかないであろうような他者のあらゆる顔つきに対するこの戦いの争点、そしてそれゆえ存在²ずるとは別の仕方の諸々の裏切りが現われるのを見る。だが「存在²ずるとは別の仕方¹で」はその前言撤回のすぐ後にその「言われたこと」を見出す事になるのだろうか？それは本書の方法論的な一切の争点なのである。

だが我々は「前言撤回」の考究をたどることにしよう。未だ言語論理学の、即ち立言的に告発されたものの領野を離れることなく、(前 起源的³な(pré-originel))における接頭辞 前⁴(*pré*) と(隔 時性⁵(*dia-chronie*))における接頭辞 隔⁶(*dia*) に我々は注意を向けることにしよう。まずは(前 起源的³な)の前⁴ についてだが、「言うこと」を「言われたこと」の付属物にしてしまう言語学の諸理論との論争は、共に断絶をもなさねばならない、起源の觀念の使用の動機である。言説と遂行的言表の諸行為、そしてよりいっそう一般的には、バンヴェニストのその如き文の言語学は、言うことを示⁷だてるものとして、言葉(*parole*)を用いるものとして、つまりは言説の行動を起こすものとして、話者つまり話し手 = 話す主体の位置を示唆する。ところで、このような行動は、話者をその「言うこと」の起源にしてしまうような傾向を持っている。だが、(近接)において、意志行動が根源的に他者、他人からもたらされる限り、レヴィナスはそこからいかなる価値 = 報いに至ることも欲していない。私としては、このような点に尋常でない困難があるのを見る。自己とは、他者によって、自らの責任を取ることの受容に特有の、(あらゆる受動性よりも受動的な)受動性と「言うこと」を一致させるために、「言うこと」からその行為の特徴を奪うことは可能なのだろうか？それはそうとして、価値 = 報いがどうであれ、そこで我々は(前 起源的³な)の前⁴ を議論へと導⁸理由へと到達する。(前 起源的³な)の前⁴ は「非 起源⁹(*an-archie*)」の非¹⁰(*an*) をもたらず。倫理的な「言うこと」は、立言的な「言われたこと」の単なるこぶに還元された、言表行為の支配、つまりアルケーから逃れる。だが接頭辞の前⁴ は時間の上での先行性を語るうとはしないのだろうか？存在論的他者のヒドラのもう一方の頭がここで身を起こし、それを今度は断ち切らなければならないのだ。存在論的他者、それは時間の上での先行性から主張された他者のことなのだ。だが主張された他者とは、それが現在(*présence*)の現在(*présent*)によって(把持された過去)が回収される限りにおいてのことなのだ。それはもはや俎上にあるところの単なる言表行為の意志行動の現在(*présent*)ではなく、現在(*présence*)の現在(*présent*)であり、レヴィナスによれば、それはフッサールがその中に(把持)を通じて、そしてとりわけ諸々の把持の把持の総合への回¹¹顧の同化 = 自己化の見地から、過去 = 生起したことの、他性を解消し、回収するものなのである。

ここでレヴィナスは徹底的に、倫理的な意味での近さというカードを、その存在的・存在論の意味における先行性のカードに対して切っている。この点から見れば、記憶、歴史、そして物語の現象学が与えたであろう支援をレヴィナスは拒否している。そこで彼にとってアウグスティヌスが意外にも「魂の延長」¹²と呼んだ(ここで話しているのは私だが、私はレヴィナスのテキストの一行においてそれを行うと考えている)ものを共時化するのはそれら三つの操作なのだ。「魂の延長」は絶え間なく、回収する = 取り込んで利用する共¹³時なき隔¹⁴時のために弁護を行う。彼によれば、物語の言語学的思惟が、時間の継起を分離、隔¹⁵時として中性化する限りにおいて、それは記憶も、歴史も認めないのである。歴史と記憶に対して繰り広げられる、この正面からの攻撃は、アウグスティヌスが新プラトン主義者たちの *διάστασις* という言葉を *distentio* という言葉で翻訳しただけに、よりいっそう意義深い。だが、レヴィナ

¹ アウグスティヌス「告白」第一巻第二章に「時間は延長以外の何物でもないように私には思われるのであるが、しかし一体、いかなるものの延長であるのか私は知らない。もしも時間が魂そのものの延長でないなら、それは驚くべき事であろう」(*inde mihi visum est nihil esse aliud tempus quam*

スは続けて、この διάστασις が他者の近接と近さがないうような回収不能の隔たりを形成することはないかもしれない、としている。この点からすれば、短く、暗示的で、それ自身について時間から継起、つまり隔たりの推移を作る、瞬間の位相を構成する(あらゆる隔たりの回収)に関係するものだとしても、諸々のテキストは数多なのである

私は次のような文を引用しよう。(《過去》把持、記憶、歴史 = 物語によるあらゆる隔たりの回収。が、なさねばならないのだ。把持、記憶、歴史 = 物語によっては何も消滅 = 没頭せず、全てが現前しあるいは自らを総合し又は自らを凝集し、ハイデガーなら言ったであろうように全てが実体 = 本質に結晶化または硬化する回収の時間化において失われるであろう、そして実体 = 本質の存在することが過ぎ去る = 生起する時間などなく、ということが回帰なき期間 = 時の周回、つまりあらゆる共時化に反抗する隔時性、即ち超越的隔時性を際立たせることを、なさねばならないのだ。)(二二ページ)

この意味で、記憶しうるものとしての、つまり記憶と物語 = 歴史によって表象 = 再現化可能なものとして表現されたものとしての過去は、主題化可能なものを掘り起こす。そのことから、「言うこと」の、前 起源的なというもののみならず、前 記憶的な、という形容は、共時化を欠いた状態にある、という事になる。ここで、前 という接頭辞は、(隔 時的な)の接頭辞隔 と合致する(《隔時性、それはあらゆる共時化に逆らう》)。だが、前 起源的な、そして非 起源的な過去のこの先行性が、記憶と物語 = 歴史の共時化可能な時間の中にはそれ自身含まれることはない、という事は熟考して然るべきだろう。それは、この意味では過去が太古の昔 = 記憶外のものである、という事である(むしろ記憶され得ない、とした方が良からう)。レヴィナスはここで梗概を現在意識の現更と見なされた諸々の把持のフッサールフッサール的概念に負っている。多分、ハイデガーの「取り戻し(Wiederholung)」もまた、『存在と時間』のタイトルと最終節の内容がそれを髣髴とさせるような、全体存在における三つのエクスターゼをあるやり方で(共時化する)との疑義をかけられているはずである。記憶が時系的な隔たりの再認でありうるということはレヴィナスの頭には浮かばなかった。なぜなら時系的な隔たりとは再 現在化 = 表象に回収され得ないものだからである。だが、それならば記憶それ自身を再 現在化 = 表象のあらゆる頸木から解放しなければならないであろう。さもなくば、《最も近き者たちへの思い出に》という胸を抉るような贅がどうして書けようか？この記憶は他性の試練に耐えんとそれ自身を喪失と悲嘆によって抑制し、《現在として回帰することはない過去》(二三ページ)、あるいは《かつて一度も現在だったことのない過去》(二五ページ)、はたまた《現在を必要としないで過ぎていく過去》(四五ページ)へと差し向けることを可能ならしめているのではないだろうか？

『存在するとは別の仕方』に述べられた言説についての我々の再構築において、我々は「言うこと」の言説の前 起源的なものと隣人の近接の同時代性とを符合させる、明白な困難の前にいる。確かに、レヴィナスの「前 起源的なもの」は可能な限り、時の流れに逆らい、脱時系列化されている。だが私はそこに真の困難を見て取るのである。つまり、《あらゆる共時化に抵抗する隔 時性》(二三ページ)と、私には近接の同時代性としてしか考えられないように感じられるものとの親近性が、問いを投げかけてくるのである。そこで、倫理が自らを開く = 始まるのはこの問いについてであり、またはむしろ倫理を開く = 始めるのはこの問いなのである。

存在論、つまり前言撤回についての最も根源的な顔つき、換言すればハイデガーにおける存在と存在者との間の存在論的差異を照らし出す顔つきにおいては回収可能であると見なされた他者の諸々の顔つきに対するこの戦

distentionem: sed cuius rei, nescio, et mirum, si non ipsius animi.)というくだりがある。それを踏まえてのことだろう。

いを、私は至上のものとして、概念的な均質(性)の領野において両義性、曖昧性の生産であると解釈されていると了解された、《曖昧語法》という語で、レヴィナスが存在論的差異について述べていることは重要　この視点からすれば、著しい＝熟慮に値する　である。我々が言説と、立言的なものとの内に「言われたこと」との間の差異と共に、かつてそこにいたように、存在と存在者との差異と共に、我々は、未だに相関関係の帝国にいる。この曖昧語法について、彼はそれは《最終的なものを意味する》事はない、と主張している(四三ページ)。この観点から、六七ページ以下　《存在することと存在者との曖昧語法》　では「存在するとは別の仕方での高みにはない「別の仕方」における「言うこと」の裏切りを追求している。確かに存在することとは存在者とは別の仕方のものである。だが耳はここでは実のところ反復でしかないような差異によって魅惑されているのである。もし私が「赤が赤く照り映える」といったとしたら(《時間が時間化(時熟)する》というハイデガーの表現について考えてもらいたい)、「言うこと」の諸外観の下に、動詞は命名の畏にかかったままになる。つまり《動詞としての「言われたこと」とは本質＝存在すること(essence)の本質＝存在すること(essence)なのだ》。本質＝存在すること、それは主題、顕示、ドクサ又はロゴス、そしてそれらの言葉によって、真理があるという事実なのである。《本質＝存在することは自らを現出させることでは断じてなく、述語の言表されたもののうちに自らを時間化させる》(六九ページ)。動詞の動詞＝言語性は、名詞の実体性に対して真の隔たりをなすわけではない。動詞の《共鳴》は、責任についての厳命におけるがごとくには認められないであろう。存在することが、その動詞のうちでは、名詞化された分詞である「言われたこと」から我々を引き離しはしないという事は認めておかねばならない。この意味では、《言語活動の中では名詞しか聴き取らないという事によって成り立っている響と同じくらい深刻なこの響》(七一ページ)からハイデガーの哲学は逃れようとしていない。存在と存在者についての曖昧語法に当てられたパラグラフにおいては、「言われたこと」において「言うこと」の捕縛に対して最も辛辣な数ページを読むことができるが、それはあたかもこの捕縛が存在と存在者との曖昧語法においてしか明確に主題化されないかのようなものである、という事はショッキングである。それは次のような曖昧語法に見られる。即ち、《「存在する」は、畢竟「共鳴する」代わりに指示(désigner)する》(七三ページ)。だがレヴィナスは自らが放免されたとは見なしていない。というのも、この決定的なパラグラフの終わりで、彼はこの辛辣な前言撤回についての問いの形式を与えようと力を尽くしているのだ。

問いは、ここでは誘惑か、そうでなければ既に裏切りをもたらしている。つまり、レヴィナスが言うように、《「言うこと」「言われたこと」/この相関関係の此岸での遡行を行わなければならない》のだ。確かに、だがしかし、問いは居座る。それは《「言うこと」とは「言われたこと」の能動形でしかないのか？「自らに言う」は「言われている」に回帰するのか？》(七四ページ)という形で居座っているのだ。答えが否定であるのは分かりきったことだ。「自らに言う」はそれが「答える」「自らを与える」「苦しむ」ということを意味する時、「言われる」から自らを切り離すのである。

従ってそれは拠り所として《還元》(七九ページ以下)というフッサールの用語を自らに課すことである。還元とは敢えて言えば、「言うこと」の還元から「言われたこと」の能動形への還元である。それは引き離しである。《還元された「言われたこと」の反響》という状態からの「言うこと」の解放である。この解放は《本質＝存在することの倫理的中断》においてしか成就されない。告白は続く。《だが全てが現われる「言われたこと」の、既に内部にある“～することはいかなる事に存するのか？”という問いと「言われたこと」からでなければ、「言うこと」の、この意味形成作用責任、身代わり　に遡行することはできない》(七六ページ)。私は(この)告白について話すことにする。もし、

確かに、「別の仕方存在すること」に決着がついたことがかつて一度もなかったのだとしたら、「言うこと」の反響が「言われたこと」「言われたこと」から「言うこと」へと遡ることの可能性の見込みの中に聞かれるのは、専ら隠し立てをする諸相関関係の連帯の裂け目の中だけ、という事になる。《だがここに》とレヴィナスは叫びをあげる。《存在することと非存在することのロゴスの彼方 存在すること、真と非真の彼方にある、「言われたこと」の「言うこと」への還元、つまり意味形成作用、責任(又はより正確には身代わり)の「一者の他者に対する」事への還元があるのだ...》(七七ページ)

「別の仕方と言えば」(AUTREMENT DIT)

第三者と正義

一 近さ、責任、身代わり

難題を繰り返してみよう。近さ、つまり責任の非対照的な関係と、本全体に付いて回る、身代わりに突いて述べられている本の半ばの言説と、「言うこと」の「言われたこと」への換言不可能性を考慮して梗概において述べられている擁護は、いかにして合致させるべき名のだろうか？本の戦略的ないくつかの場所でこの難題と共に、第三者と正義のテーマの面食らうような乱入が、見るべき何物かを持っているのだ、という事を私は示したい。それはパロールの言行為 = 審級としての、「言うこと」を結び付ける方程式、そして存在論なき倫理の女王である、言行為 = 審級としての責任について、本全体を通じて述べられている言説の可能性そのものとともに、前もってそれを言うために、でもある。

近さ、責任、身代わりの三つ巴(triade)に充てられたページは、ケリュグマ的なものと言わないために、固執する(語の)使用によって際立っており、心に付きまとうものといわないように、誇張の比喻について宣言的なものと言われうるような調子で述べられている。私が倫理に「言うこと」の行為付けを特徴づけるのは、語調と比喻に関連する二つの特色によってである。だがこの「言うこと」はふさわしい言表なしで留まることはできるのか？私に言わせれば、第三者と正義の地位が生じるのはこの問いの処方においてなのである。

第三章(感受性と近さ)と第四章(身代わり)について集中的に取り組むことにしよう。それらについては、筆者が、それは本の要であり、ある意味で本の起源であると我々に言っている。

激越なものへの登攀は急速である。「近さ」は(頭にこびりついて離れないもの)と名付けられる。この突然の切断によって、同者の他者に対する差異は非 無差異 = 無関心(non-indifférence)になる。頭にこびりついて離れないもの、においては「言うこと」は隣人によって実行される。(「言うこと」、そこでは話す主体が他人に身を晒し、言表された主題の客観化に帰することがない。主体が考えを示す鎌田は「言うこと」の中に身を晒すために、何が主体を傷つけにやってきたというのか？！)(一三三ページ)。存在することが苦しんでいる、というためには、存在することは身を晒していると言わねばならない。そして存在が身を晒していると言うためには、存在することが痛みつけられ、傷を負い、外傷を負っている(traumatisé)と言わねばならない。より悪いことには、「言うこと」は私 *me* の対格に対する被告なのである。我々は要約も、「言うこと」と「倫理」の二つのプロブレマティークの岐路に立つことになる。(主体性の固有な意味形成作用とは「近さ」だが、「近さ」と俳味形成作用の意味形成性そのもの、つまり他者のための 一者の確立そのもの、即ち全ての主題化された意味形成作用が存在する事のうちに反映する、意味の確立なのである)(一三五ページ)。目下のところ、予備として、文の最後の構成分子は保留しておく事にしよう。それは我々を外洋へと押し流すものなのである。そして、近さと結びついている、意味形成作用と意味形成性を、強調しておく事にしよう。

なぜ、頭にこびりついて離れないもの、傷、外傷という激越への登攀なのか？なぜ悲壮な、そして病的な事にお

ける感受的な = 病的なもの、の激化なのか？それは逆向きの、現前、つまり現象制の、頭にこびりついて離れないものには全くけりがついていないからである。レヴィナスは言う。《そのシルエットを描写するか、あるいは告げるようないかなる先触れ人をも他者としての隣人は先行させない。彼は現前しない》(一三七ページ)(傍点は引用者)。隣人は現前する事なく私に関わる。「言うこと」が決して終わる事がないのはこの(現前する事なしに)なのである。《頭にこびりついて離れないもの、は良心ではなく、良心の形質 = 種でもなく、良心の態様でもない》(一三九ページ)否定の中での冗長。そのようにして顔(visage)の言語活動そのものに押し付けられた暴力について見定めなければならない。確かに、他者は顔において、見られるべく与えられているという事は信じられるかもしれない。だがそんな事は断じてないのだ。それは再現化 = 表象を逃れており、それは(現象性からの離脱そのもの)(一四一ページ)である。それは共通の現在である彼と私との間にもおらず、逆にこの研究の第一部の終わりでナイーブに定式化された、待ち(attente)にいたのである。隣人は私の同時代人ではない。さもなくば、我々は先に見てきた記憶、歴史 = 物語、お話が負わされた共時化へと回帰する事になる。《近さとは、想起可能な時間(について)の妨げである》(142ページ)。《それは黙示録的に、時間の破碎と呼びうる。だが、問題となっているのは、現在が記憶しえない過去の痕跡でしかないような記憶や修史の資料編集によっては現在に共時化しない、非歴史的な、つまり「言われたこと」にない時間の、忘却されつつも抑えることができない、隔 時性なのだ...それが顔の非 現象性の意味なのだ》(一四二ページ)。他者は自らを示すことなく、つまり自らを晒すことなく、命じる。《節度の無さ》対(出会い)。愛撫の魅惑、つまり(これほどまでに露わであること)のなかった露出状態(144ページ)のみを、この激越主義は切断する。《かさかさの肌、それ自身の痕跡》(148ページ)を祝福するこれらのページは、何という奇妙な美しさだろう！だが痕跡の探求は歩み (譲渡 外 = 過度の、つまり法外なもの)の痕跡(146ページ) を再開する。

譲渡 外、つまり法外は近さから身代わりへ、つまり他人によって苦しむ、という事から、他人のために苦しむことのへの運動に集結する。身代わりは近さに、何を付け加える 過度において 事ができようか？ 何が身代わりを(「言われたこと」の中に自らを示す前に 言うこと の中に意味を形成する意味形成作用の意味形成性)(一五八ページ)の等価物にするのか？ありていに言えば、この核となる章(分割刊行に負い、またその最終的な枠内で保存する、著作の全体を要約する性格に加えて)は、かされた傷の用語法、つまり迫害の、人質にとることの、より一層激越な用語法に頼ることによって行使された切断の効果を増大することにのみ、成功している。自己 はそれを選んでいないし、望んでもいないのに他者の場所を占有する。「人質」の条件としての「自己の意に反して」は厳命の激越な受動性を意味する。「この」パラドックスは倫理的な厳命を言うことを定められた残酷非道の状況(condition)によって(感情を)傷つけるに違いない。非 倫理は倫理を「過度」の徳の唯一の誘意性のうちに言う。もし身代わりが、「自己」が寄付、奉獻という至上の行為において、己自身についての帝国を再発見するような、苦しむ 意志に還元され得ない何かを意味するはずなのであれば、それは(自己の外への自己の放逐、自己は自己自身を空にしてしまう)(一七五ページ)ものでありつづけなければならない。要するに、それはその《意地悪さそのもの》(一七五ページ)によってこそ、(うるさく責め苛む憎しみ)(同所)が 善 の旗印の下での厳命の(他人を耐えること)を意味するのだ、という事にならなければならない。意地悪さによって倫理的状況の激越な受動性の度合いを言わしめることにある、パラドックスの異様さを読者諸氏は見定められたかどうかは私の知るところではない。が、好意に対する呼び掛けを意味することを請われているのは(ひどい侮辱)、つまり不正(義)の極みにおいてなのだ。《世界の中で哀れみ、同情、許し、そして近さがありうるのは、人質という状況によってなのである》(一八六ページ)。それ

だけではない。なおも「迫害の外傷」(一七八ページ)が「弾劾の容赦無さ」(同所)、要するに際限のない罪責感を意味しなければならない。ここで、ドストエフスキーはイザヤ書、ヨブ記、伝道の書(*Qohélet*)を引き継いでいる。そこには迫害、屈辱、贖罪、つまり「絶対的な、自由に先行する弾劾」(一八七ページ)が、クレッシェンドの如くある。(が、)存在論から引き離された倫理は直截的、固有な、ふさわしいランゲージュを持つことはないのではなかったのか？この問いは「存在するとは別の仕方です」を書いた哲学者によって述べられた言説において、第三者についての主題によって演じられた戦略的役割に関わる、本書の後ろで提案されるであろう読みの仮説の途上に我々を投げ出す。言説の急迫状態は「心を平安にし、慰めるような、神学的な」(一八四ページ)あらゆる答えを否認し、拒絶することによって更に深刻化する。レヴィナスのテキストは、この見地からすると、基礎に関わる、あるいは正当化の機能 = 関数と同じ答えに割り当てられる限り、激しく反神学的である。(ここには)「贖罪としての自己」は行為性と受動性の此岸にある(一八三ページ)という語の砂漠がある。が、「それは起源的な = 起源を持つ 非意志的な 贖罪である。というのはそれは意志の意志的行為に先立つからである」(一八七ページ)のだから、自己が要請されているのは「しうる」(贖罪しうる)(一八七ページ)人としてではない。還罪が平等、完全な一致、協約可能性を、ヘーゲル的な許しのうちの如く再建する限りにおいて、贖罪が還罪ではないのは、この先行性においてである。レヴィナスはそのようなやり方、そのような値において許されることは望んでいない。許すことは言わずもがなである。

責任について「言うこと」が、あらゆる平等化を行う関係の前言撤回に対して、ひどい侮辱へと展開された、傷の誘導的・比喩表現を付け加えることはできない、という事を我々は十分に示したであろうか？加えられた暴力の比喩研究についてはどうだろうか？主題としては何も責任については言われていない、という事を我々は十分に示したであろうか？意地悪さについての言説の、激越への登攀の中に、責任を言うことが、自らを使い果たすが如く、という事を？

二 第三者と正義

第三者についての個所で述べられている、正義についての言説が現われるのは、敢えて言うならば、言葉のテロルのこの深奥についてである。が、いかにしてそこへと辿り着くのであろうか？本書、又本書の言説の中では、それは人目を忍ぶようにして行われる。それは言われも無く過ぎてきた、言ってきたかの如く、一度ならず二十回も三十回も行われる。力のこの働きが意味を成すのは、多分、専ら因果性の事後性(*après-coup*)においてである。ここに主題の最初の出現がある というのは、梗概(一三 四三ページ)において唯一認められているのは、まさしく(この)主題だからである。このテキストにおいては、プラトンなら「第二の航海」と呼んだであろうような事柄が現われはじめている。「諸々の比較不可能なもの間での正義が必要なのだ(以下続き)」(従って諸々の比較不可能なもの同士の間での比較とシノプシスが必要である。共にあること、または同時代すること。従って主題化、思考、歴史そしてエクリチュールが必要である)(三三ページ)。だから、この明らかな回帰を正当化することについての問いが立てられる事になる。これまで見てきたテキストの後に、レヴィナスは続ける。「だが、存在することの他なるものから、存在することを理解しなければならない。近接の意味からの存在すること、それは第三者のために、そして第三者に対して(*contre*)、他人と共に、自己に対して第三者と共に存在することである」(三三ページ)(他人「によって」と「のため

に)から、(と共に)になっていることに留意されたい)、《第三者のためにあるいは第三者に対して)、《自己に対しての第三者と他人と共に) (同所)。そして少し離れたところでは、《この脱相互利益存在[梗概のタイトル]...存在することと平和の共時性とを比較し、集め、思考する正義が出現してきている) (三三ページ)。問題となっているのはまさしく、「言うこと」による 言われたこと (考えること、正義、そして存在することについて) (三七ページ) 言われたこと なのである。言われたこと は哲学者達の間では(言い直し) (三九ページ)となろうし、それはプラトンの善とデカルト的無限の再私有化をすぐに可能にするであろう。《諸々の語 歴史的に構成された語彙の要素 が、その記号の機能と使用を見出し、語彙のあらゆる可能性を増殖させる事になるのは、この「既に言われたこと」の中でなのである) (六五ページ)。仮説は明確なものとなる。即ち、哲学することを可能ならしめる「言うこと」の範疇を主題化することを可能にするのは、正義なのである。だが、いかなる場所、いかなる地位について話されているのか？ 位置、つまり第三者の場についてというのは、即ち近接者ではない、聖書やプラトンの「ソフィスト」において言われるような遠き者、異邦人であるような他者のことである。《近さが直ちに正義の裁きなのではなく、まず第一に他人に対する責任であり、それが第三者の参入によってのみ正義へと変わるということを想起させることも、しなければならない) (八四ページ、第一節) (ここでテキストは第五章第二節に飛び事になるが、それは後に触れることにしよう)。だが第三者が近さと身代わりについて「言うこと」の周辺で際立つ、この道のりを我々は少しずつ進んでいくことにしよう。近さについての章で人間性について語りつつ、レヴィナスは近接の《空間の均質性》が《差異全体に対する正義の人間的な意味抜きで、その結果、正義がその言葉 = 終わりとなるような近さについてのあらゆる動機抜きで考えられるようになる) (一二九ページ)かどうかを自問している。そんなわけで、「正義の要求」は近さの織物の裏面で織り上げられる(一二九 一三二ページ)。レヴィナスは言う。《意味形成作用の再現在化 = 表象は、それ自身、第三者と正義への配慮である限りにおいて、意味形成性のうちに生じる) (一三二ページ)。しつこく、テキストは第三者と正義への配慮でもって自らに句切りをつける。《正義の必要性によって、見定め、主題化、現われ、そして正義を導くのは第三者の近さである) (一八八ページ、第一節)。この段階で、人間の間で正義によって確立された比較が、《比較の可能性) (二〇一ページ)を排する身代わりを「言うこと」の、前言撤回を出現させるのである。弾劾(accusation)そして対格(accusatif)に固有な非対称性について、《私を他者について不揃いの状態にする非対称性が、法、自律、平等を再び見出すであろう 正義において 社会の上部構造へと至る道がいかなるものであろうと) (二〇二ページ)というこの覚え書きを言うことで、対比は認められ、引き受けられる。だが第三者とは誰なのか？ それはその論点を見定めるのには重要な問いである。レヴィナスは言う。《他者、つまり私の隣人もまた他者に対しては第三者、彼自身隣人であるという事実は思想、良心そして正義の誕生であり、それは哲学なのである) (二〇四ページ)。そこでは私が後で擁護するつもりの、正義、真実、そして哲学的言説の可能性に連なるテーゼが素描されるのが了解される。だが、他者の他なるものという観念、そして他者、つまり私の近接者の他なるものについて掘り下げてみることにしよう。近さは二つに分かたれることによって倍加する事になるのだ。

第三者、正義、そして真実についての問いが最も直截的に、敢えて言うならば真正面から立てられるのは第五章であり、そこでは註が多くの反復へと回されている。《この意味すること、この他者に 対する 一者の中で、知識、(つまり)問いへと導きうるし、またそうしなければならないもの...この意味することにおいて、存在論、そしてそれによって現在(présence)、示顕、真理の陰無き真昼、見積もり、思想、叙任、制度へと至るもの 多分それらを示さねばならないだろう) (二一五ページ)という最初の一斉射撃 (§ 1, b節)が展開される。「第三者」「正義」という

語は言われていないが、知識の繰り返し、反復、再言は、第三者と正義の水平線の如く先行している。テキストはここで第三者の歩みよりも先へと進んでいるのだ。二四五ページを読むことにしよう。〔近さである〕責任は、第三者が参入してくるなり困惑し、問題になる。第三者とは隣人の他なるものであり、他の隣人、他者〔Aは大文字〕の隣人でも当然あり、単なるその同胞なのではない(二四五ページ)。〔遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ〕というイザヤ書第五七章一九節に言及しているこのページ全体を、読む必要があるだろう。新たな段階のこの転覆、つまり転覆の転覆の値は、こう言ってよければ、甚大なものである。レヴィナスは言う。〔その意味(形成作用)が一方方向=特異な意味(sens unique)に向かっていた、「言うこと」のうちに、第三者は矛盾を導き入れる。...正義、つまり今日存在、同時代性、集合、集合、秩序、主題化、諸々の顔の可視性、そしてそれによって、志向性と知性が...体系の可能性、そして又、正義の法廷を前にしての如く、平等を尺度とした共現在(coprésence)も必要である(二四五ページ)。より活気付いてレヴィナスは続ける。〔比較し得ないものの比較、つまり他者との関係、近さからの「同者」の主題化とは、「言うこと」の直截性なのだ。...〕さらには、〔正義は再現化=表象の同時性を要求する。そのようにして隣人は可視的なものと、そして顔を失い=じろじろ見られるものとなり、自ら現在化し、私に対する正義もがあることになる。「言うこと」は「言われたこと」に自らを繋ぎ止め、まさに書き留められ、本、権利=法、そして学知となるのである(二四七ページ)〕。

第三者の地位、つまり正義が話し掛ける場は、我々が読んでいるところの言われたこと のうちに「言うこと」が自らを書き付ける限り、そこからレヴィナスが話し掛ける場でもあるのだ、という仮説をあえて定式化するために、それらについて我々は十分に言ってきたであろうか。私はこんな隠密の告白に一度驚いた。〔目下意味形成作用、隔時性、そして存在することの彼方への近接という超越について我々が述べている言説 自ら哲学たらんとする言説 は、主題化、諸項の共時化、体系的言語活動への依拠、存在する(être)という動詞の頻繁な使用であり、存在することの懐の中へと、存在することの彼方へと思惟されたと自称するものの意味を引き戻してしまうものなのだ。だがこの不正取得にしてやられたというのだろうか？(二四二ページ)。〔我々が目下述べている言説そのもの...〕(二四二ページ)〔不正取得(subreption)トイウゴ八極めて特異である。二四四ページに戻ってみると、それは(今の論考が自らであり続けると主張する)(二四四ページ)場の局在化によって、明確になっているのだ。正義は単に国家の場なのではなく、それはその(秩序...が西洋哲学の第一線にある)(二四四ページ)真理と存在することの場なのである。レヴィナスはここで、心配する。〔何故我々は、存在することの天上界に、存在することを探しに来たのか。なぜ学知なのか？なぜ問題なのか？なぜ哲学なのか？(二四四ページ)。問いの場について答える代わりに、突然の一步後退が行われる。レヴィナスは言う。〔従って、意味形成作用、もしくは近さ あるいは「言うこと」のうちに、知識と存在すること、つまり 言われたこと の密かな誕生、即ち責任のうちに問いの密かな誕生、を追わねばならない(244ページ)。もし私が良く理解し、自分が哲学者であると人々が言うのであれば、頭にこびりついて離れないものと人質取りという諸々の比喩、つまりより声高に主張された(外傷的暴力)(二〇二ページ)でおしまいにすることはないだろう。責任を問うこと、つまり(責任のうちでの問いの密かな誕生)(244ページ)を見抜かなければならないのだ。が、私は以下のような二つの読みを仲裁することはできない。即ち一つの読みとは、近接者の遠き者への飛躍、つまり諸々の顔に(可視性)(二四五ページ)を与える、正義には現われない顔についての提題であり、もう一つの読みとは(密かな誕生)とりわけ(近さのうちでの学知の密かな誕生)(二四五ページ)の喚起である。より声高に述べられる言説の尺度に従えば、同様の密かな誕生とは(不正取得)の容疑者ではないのか？

二六六ページで《だが正義、国家、主題化、共時化、ロゴスと存在することの再現在化の理由は 共感関係の中で、それが明るくなるような近さの可解性を吸収することには成功しないのではなからうか?》と主張されている、とりわけ明瞭なテキストによって、哲学的言説の場としての、第三者、正義についてのこのパラグラフを終えたいと思う。が、同様にして二六四ページで《私が今まさに述べている最中の言説について真であるもの》と述べられている、宣言の問い掛けるような展開は念頭に置かれる事になる。

三 存在論の反復?

ひとたび前進がこの極点に達すると、問いは『存在するとは別の仕方』の中で、伝統を再言することのやり方になってしまうのかもしれない、ポスト倫理の基礎があるかどうかを知ることについて自問する事になる。本書のエクリチュールは、平等化する正義に対して非対称的な身代わりのこの一步の唯一の利益を引き出しているのだろうか? 私は以下のような素描に敢えて身を晒してみようと思う。

先の問いに対する答えはイエスである。レヴィナスにはポスト倫理とも言いえるような、準存在論(quasi-ontologique)がある。私はそれを 《主題》(主題化的(主題系))、つまり「言われたこと」、それは私の言いかたでは責任の倫理を超えるものだが、それらの完全な意味で いくつかのいくつかの主題のうちに識別する。私はそれらのうち四つを覚えているが、それらは列挙するにとどめておこう。

まず最初に挙げるべきは、善良さ(bonté)とプラトン派の 善 への依拠である。後者は周知のように、ウーシアの彼方にある(この突破口、敢えて言えば弾劾し心を傷付ける責任を巡っては諸々の引用はあふれるほどある)。

続いて挙げるべきは、隣人と第三者の彼方に、この暴力的な比喩的表現全体の節度の無さの辛辣な言葉によって対称とされた無限である。ここでも引用はあふれかえるほどある。「無限」の循環に、二つの関連した主題が属しているのである。それらは《無限の栄光》と《証言》であるが、それらについては私は『レクチュール』の中でコメントしておいた。

その次は彼性、それは三人称でいっぱいになっているもので、それはプーバーの言う「汝」が余りにも無垢な親密性において丸め込むというリスクを負ってしまっている。奇妙な仕方と彼性と《第三項性》(二三四ページからの引用)とを和解させる一つのテキストしか、私は引用するつもりはない。多分他のテキストは私は見つけることができなかったが、それはこの謎めいたページを輝かせることができよう。それは二六一ページにおいても同様である。

最後に、そして頂点に位置するものとして、それがレヴィナス自身によって述べられた哲学的言説の中へと乱入するものとしての神の名がある。この例外的な名は、命名の最初の断罪について、それが存在論に対する戦争機械として役立つように、名詞の復讐を刻む。ある見方をすれば、「言われたこと」の意味形成作用と呼ばれたものの例外として、「言うこと」の意味形成性についての問いに結び付けられた、より幅広い意味形成作用を、名詞のこの回帰は有している。また後では、いかにして名詞化が実詞化した「言われたこと」の利益になるように動詞を回収するのが見られた。だが、例外の位置に名詞を求める意味形成性の要因(moment)があるのだ。それは個として

の顔が明白であることそのものである。確かにそれは 我 ではないが、我である我であり、一般化されない我である。
〈言われたこと のうちに「言うこと」が身を隠し、自らを守るのではなく〉三ページ、「言うこと」はひどい侮辱、傷
に身を晒す、傷つきやすいものなのである。思い返せば、主体性はその「言うこと」が個有名について 言われたこ
と の中でそれを証拠立てるような、存在することの様態ではない。名 は「それは名なのか？」又「意味形成性、
さもなくば 言われたこと 無き『言うこと』を意味する 名 は言いえぬものに関わるのだろうか？」というコンテキストの
中で神が初めて示されているのは偶然ではない。名 は主題化することはないが、にもかかわらず意味するのであ
る。全ての名は、この 名 によって光り輝くのだ。そして諸々の名詞で、レヴィナスは敢えて誰？ 誰性という
問いをたてる(四六ページ)。誰に対する他人、誰に対する私……、それらは何が、とか、いかにして、というような疑
問詞がそうであるようなテーマではない。名 神の名と諸々の個有名 についての問いは、意味形成
作用の彼岸に、意味形成性の浜辺全体を取り戻すこの浜辺の上で、名 の水平線の下で、諸々の名は駆け巡る。
存在することの外の、または存在することの彼方の 名 をレヴィナスはこのように言う。〈だが存在することの外の、ま
たは存在することの彼方の 名 、個性性に先立つ個は神と名付けられる。神性の全て、言うなれば個別者たちがそ
れらの概念へと非難するような、要求する 過る神々が、存在することに、それは先立つ〉(八九ページ、第一項)。
私はここでこの神学なき 名 を措くことにする。神学とは幻影(一五一ページ)に引き渡されたものなのだから。そし
て(全体性)が存在論へと再び落ち込んでいく一方で、(無限)が倫理へと落ちていくのは、この 名 の影響によっ
てなのである。

あえて私は最後の斉射撃を行うのだろうか？だがそれを私に許可するのはテキストなのだ。即ち、「存在するとは別の仕方」の最後で表面を作り直してしまう、古い主題が存在しているのである。それは「～がある」(Il y a)につ
いての主題である。意識的に「別の仕方と言うなら」と題された、最後のテキストの外部の奇妙な点を、待たねばなら
ない。それは、存在することと責任、存在論と倫理という二つの敵対するものが同時に釣り合いが取れるような非
意味(non-sens)からたえず甦る可能性に対する吐き気を示す言葉であるところの「～がある」のゴルゴンが再び立ち
現われるのを見るためである。それについてはレヴィナスも(ディレンマからの抜け道はなく、存在することからの抜
け道も無い。宿命、つまり「～がある」 存在することの深奥での恐ろしい外部性 のやむことの無いごった
返しの恐怖は、己を死への不安に加えるのだ)(二百七十一ページ)と言っている。意味全体が存在することから生
じたのかと、これらのページ全てを通じて、自問される。だが、もし(単数の)意味というものが無かったとしたら？もし
無知と忘却とが最後の語であったとしたら？死を恐れてということ、それは「～がある」という全き一者であることの恐
怖(二六三ページ)なのである…。それについては、全き一者は 保証はないにせよ 外示、耐えることの
受動性、要するに正義、近さと身代わりとに対する対決 (他性の 彼方 という圧倒的な重荷)(二七七
ページ)への依拠の他なる答えではない。なぜなら、「言うこと」は 言われたこと によって常に裏切られている(二
七八ページ)からである。

更にもう一言付け加えておこう。正義によっては、人は記憶の回帰、つまり記憶しうるものの断罪の彼方を望むこ
とはできないのであろうか？そうでなければ、どうやってレヴィナスは(最も近き者たちへの思い出に)という暗鬱な賛
を書き得たのだろうか？